

品質保証における検査前プロセスの重要性

◎高山 拓也¹⁾

地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立総合病院¹⁾

【はじめに】近年、自動分析機、測定試薬の性能向上により検体検査の標準化がすすみ、多くの施設で同等の検査結果を報告することが可能となっている。また 2018 年に施行された医療法の改正や ISO15189 認定では検査プロセスのみならず、検査前、検査後プロセスを含む品質保証の概念が注目されている。当院検査室では ISO15189 認定を取得し、品質保証に努めているが、その中で、病棟で 1 日室温放置された検体が提出され、検査結果が報告される事例が発生した。この事例を防止できなかったことを考察するために、全血室温放置が検査結果へ及ぼす影響について検討を行ったので報告する。

【方法】健常者検体 (n=10) を室温で 24 時間全血放置をし、当検査部の生化学項目 38 項目でデータ変動についての検討を行った。採血後、直ちに測定した結果を基準とし、放置後検体との差を変化率で評価した。

【結果】明らかな変動が見られた項目は Glu(-88%)、IP(+201%)等であり、また LD や AST といった酵素項目、HDLc や LDLc といった脂質項目、電解質項目等ではいず

れも変化率 10%以内となり、明確な変動はみられなかった。

【考察】本事例では室温放置により変動の少ない項目がオーダーされていたため、異常値とならず、結果報告までに至った。

【結語】多くの施設で検査報告のロジックが組まれているが、オーダー項目によっては全血室温放置された検体でもそのまま報告される可能性があることがわかった。精度管理幅や生体内の変動が大きい項目もあるため、正確な検査結果が報告されていないことが示唆される。日々の業務の中で検査技師が携わる時間の多い検査プロセスに重点が置かれることが多いが、検体採取や搬送といった検査前プロセスが疎かになると、検査プロセスでの取り組みが無駄になってしまう可能性も大いにある。検査結果に影響を与える原因の 60%以上が検査前プロセスという報告もあり、改めて重要性を認識した。検査前プロセスにおける検査結果に影響を及ぼす原因の模索と、それらを除去する取り決めの作成が、今後の検体検査の品質保証に不可欠である。

連絡先：054-247-6111（内線：2256）